

親鸞の僧伽について(二)

丸 田 善 明

本稿では、親鸞が時代の末法状況を自己の内実性の根拠とし、僧伽の普遍性としての同朋意識を導きだしたことについて論究したい。

まず、親鸞の末法体験を『化巻』の上にみるならば、われわれは次のようなことばに出あう。「三時教を按ずれば、如来般涅槃の時代をかんがうるに……わが元仁元年甲申にいたるまで二千一百八十三歳なり」。このことばは、仏滅後を積算し、元仁元年が末法のさなかであることを論証したもののだが、この中に言われる「元仁元年」が、親鸞にとつて重要な意味をもつものだとして、従来いろいろな説が行われている。だが、現在のところ、それらの説は推論の域を出ていないものようである。家永三郎氏は、昭和44版の『新訂親鸞聖人行実』において、元仁元年五十二歳の条に、「この歳、他力廻向の己証を開いた」とし、かつて自身が発表した三願転入の時期いかにについて、「三願転入については、史実ではないという説があり、また史実とする場合でも、年月については諸説がある。今は、親鸞のこの年以前の行業と、顕浄土方便化身土文類の文義とを推察して、上のように認定した」と言う。ここに諸説の異論点を拾象して「他力己証」の年次とおさえていることに注目しよう。己証、即ち「自己の状況」としての体験を通して、末法史観は史観を離れて親鸞の現実となつた時期であることがここでは重要なことである。

ここで「親鸞の現実」を『化巻』の中にさぐつてみたい。親鸞は、三願転入の表白によつて自己の境位を明らかにしたのに次いで、「聖道の諸教は在世正法のためにして、またく像末法滅の時機にあらず。すでに時を失し機にそむけるなり。浄土真宗は、在世正法、像末法滅、濁悪の群萌、ひとしく悲引したまふなり」と述べ、更に「如来涅槃の時代を勘決して、正像末法の旨際を開示す」として道綽の『安樂集』によつて正像末法の旨際を弁じ、続いて「しかれば、穢悪濁世の群生、末代の旨際をしらず、僧尼の威儀をそしる。いまのときの道俗、おのれが分を思量せよ」といい「元仁元年」の文にことばを継いでいる。

この一連の文章の中で、彼は時と機を明らかにすることによつて「聖道浄土の真偽を顕開」しようとする。それによつて明らかにしたものが「末代の旨際」であるが、彼がこれを開示しようとするのは「濁悪の群萌」、「穢悪濁世の群生」に向つてであることは文脈の中に明らかである。

すでに『化巻』の巻頭で、「濁世の群萌、穢悪の含識」が悲願の対象者であるとみていることから、親鸞の「末法状況」は濁世の群萌・群生と同位置における感得であつたといえるだろう。文章に即して見れば、この群萌・群生は在世正法、像末法滅の不定多数の人々をさすと考えるのが一般的であると思うのだが、彼の「元仁元年」の現実に即して見るならば、彼の中にあるものは、実像の伴わない単なる人々ではなく、彼の周辺の人々であつたことができる。諸資料で明らかのように、「元仁元年」のころの親鸞は常陸国稲田に居住し、明法房の帰依などに代表されるように「専修念仏の義をひろめ」(『伝絵』)ていた時期であり、彼の伝道の対象者は、獺

師、商人、農民など、当時の支配構造の下層におかれた人々であった。笠原一男氏は、当時の東国農民の精神生活の中心をなしていたものは、支配構造の中に組みこまれた、鎮守社と天台・真言寺院であつたと指摘しているが、『親鸞と東国農民』、そのようなところにも末法の旨際が開示されなければならないという親鸞自身の止むがたい情動があつたのであろう。

だがその情動はむしろ危険なものである。それをおし進めてゆけば、いつしかそれは支配の理論とつながる。それは、「業行をなすといへども心に傲慢を生ず」るものとして善導が誡めているところのものだからである。善導によれば、それは名利の心と一致し、同行善知識を認めず、正行をさまたげる心より生ずるといわれるが、親鸞はことに「同行善知識に親近せざる」ことに大きな関心を持つていたようで、『大経』が教誡する善知識にあうことの難について『涅槃経』を引文し、信の成就しない理由として、得道のひとを信じないことをあげている。

既に吉水教団において、師法然の主著や真影を付属された彼が、今「まことに傷嘆すべし」と悲嘆しなければならなかつたのは、彼自身が「得道のひとを信ぜず」という涅槃経のいたみを体験できる心的状況にあつたからだろう。「元仁元年」は法然の十三回忌であつた。今、よき人法然に思いをせせながら「真実信」に心をいたす時、彼の心の中に彼のまわりにうごめく群生がなかつただろうか。既に往つた人を想う心には空漠がある。彼の現実には、感傷的な法然回顧をゆるさない。彼の心をよぎるものは、彼ら「いなかのひとびと」と共に如来の僧伽の一員たりうるかどうかの問いではなかつたろうか。

『恵信尼消息』の語る寛喜三年四月十四日の病臥内省の逸話は、彼が当時「身づから信じ人をおしへて信ぜしむる事、まことの仏おんをむくゐたてまつるもの」であると思つていた反面、形にあらわれるものは「すざうりやくのためにとて」三部経千部誦誦というものであり、これに対する親鸞の深い内省があつたことを伝えている。ここに「自信教人信」の如来の世界を引きうけながら、その具体的顕現である「同行善知識」——僧伽——を信ずることができないという精神の交錯状況をいかに親鸞が克服していつたかをみることできよう。

親鸞はそのような心的状況を凝視する中で、「仏願力に帰しがた、大信海にいがたし」という悲嘆に到達している。それによつて、今まで如来の僧伽を引きうけようとしていた想い——「本願の嘉号をもておのれが善根とする」精神状況——が、逆に如来の僧伽（願海）に引受けられていたという確信に転換していくことになる。だが、自己の状況に対する悲嘆は、それで止まるものではない。最晩年の著作である『愚禿悲歎述懐』和讃には、なおも有情利益の心の去らないことを歎いているし、この和讃を含む正像末和讃の末尾では「小慈小悲もなければ、名利に人師をこのむなり」と自己を凝視し続けている。この持続する悲嘆は「ふかく如来の矜衷をし」る故の発露であり、それはそのまま「無辺の生死海をつくさん」という如来の僧伽の運動に乗託することのよるこびと表裏一体の感情である。晩年の親鸞がたどりついた境地、自然法而の世界は「行者のはからひなき」「行者のよからんとも、あしからんともおもはぬ」「仏智不思議の世界であることを述べているが、ここに「親鸞は弟子一人ももたず」『歎異抄』という徹底した同朋意識の誕生を見る。